

大学教育におけるポストコロナ禍の オンライン授業の展望

—「教育学 A/B」における教師・学生間の往復書簡の
授業形態の継続から—

山 口 理 沙

*Being a good conversationalist is
really what a liberal arts education is all about¹.*

— Mark VONNEGUT, *The Eden Express*

会話に長けた人間になることこそが、リベラルアーツ教育のすべてである

(引用者訳)

— マーク・ヴォネガット, 『エデン特急』

はじめに

日常をひとまずのところ取り戻し、社会はポストコロナ禍の時代を迎えた。コロナ禍を経てなお、オンライン授業が大学では継続して採用されている。コロナ禍の調査ではあるが、「高等教育段階における遠隔教育の実態に関する調査研究」によると、調査研究の対象校において開講される全授業科目数のうち、全部又は一部の授業時数を遠隔授業として採った授業科目数の平均割合は、令和3年度に約6割であった²。さらに令和4年度は約4割となっている。加えて「大学・高専における遠隔教育の実施に関するガイドライン」により、「遠隔授業により実施する授業科目において修得する単位数は、大学設置基準第32条第5項等の規定により卒業要件として修得すべき単位のうち60単位を超えないものとして上限が設定」されたうえで認められている³。今後中期的に、オンライン授業がどのように対面授業（文科省が示す用語では「面接授業」とされるが、本稿では一般に使用されている「対面授業」の用語を以降も用いる）と併存していくのかについて、大学機関および授業担当者は注視していくこと

になるだろう。

本稿は、青山学院大学のリベラルアーツ科目、いわゆる青山スタンダード科目として担当する科目「教育学 A」、「教育学 B」のポストコロナ禍のオンライン授業の位置価値を考察するものである。なお、コロナ禍以前のリベラルアーツとしての本科目については既に拙稿にて論じている⁴。さらに、コロナ禍におけるオンライン授業としての本科目の授業デザインとその効果についてもひとまず検討を終えた⁵。そこで本稿では、コロナ禍以後のオンライン授業における本科目の検討を主題とする。本稿では、コロナ以前、コロナ禍、コロナ以降の三種類の背景を持つ授業を経て、対面授業とオンライン授業の検討を通し、大学教育におけるポストコロナ禍のオンライン授業の展望を模索していくこととする。なお、本稿では、2020 年度より前をコロナ以前の通常授業（対面授業）、2020 年度から、2022 年までをコロナ禍のオンライン授業、2023 年度から 2024 年度現在までをポストコロナ禍のオンライン授業として区分する⁶。

青山スタンダードにおける「教育学 A」と「教育学 B」の授業研究を行った理由は、リベラルアーツとして教育学を学ぶ意義について模索することにあった。その後、コロナ禍におけるオンライン授業を進めるなか、この特殊な状況下での授業運営と学生の学びを授業のひとつのかたちとして残した。その時には、この授業形態がその後も続くものとしてではなく、コロナ禍のあくまで代替的な手段として、少なくとも筆者は捉えていた。しかしながら、オンライン授業は特殊な状況下の授業運営の手段ではなく、常態化したものとなった。完全な対面授業に対してのオンライン授業のみを進める形態だけでなく、対面とのブレンド型、いわゆるハイフレックス（もしくはブレンディッド）型の授業形態や、対面授業時の補講手段として、オンライン授業は教育現場において普及することとなった。

現在、青山スタンダードにおいて担当する学生は、中等教育においてコロナ禍のオンライン授業を体験してきた年代である。彼ら彼女らは、ポストコロナ禍のオンライン授業をどのように捉えているのだろうか。また、教育者は、ポストコロナ禍において、どのようにオンライン授業を活用していくことができ

るのだろうか。本稿では、この二点について、青山スタンダード科目「教育学 A」と「教育学B」の学生のリアクションペーパーも参照しながら考えていく。

オンライン授業としての「教育学 A」と「教育学 B」

青山スタンダードにおける教育学 A および B は、それぞれ異なった各論を通して教育学を提示している。教育学 A では、「教育」を主軸に、教育学 B では、「教養」を主軸に置いてきた。軸を異にすることで、教育へのアプローチを多角的に示すことができた。両科目は独立したものであり、いずれかのみ履修も、同年度に両方履修する学生もある。数年後にもう一方を履修するという学生も確認できる。元来、相模原キャンパスでの開講科目であったが、オンライン授業に移行したことにより、両キャンパスの学生の履修が叶ったことも、学生の教育学への捉え方に多様な専門性が反映されており、全体で共有することで多角的視座の獲得が可能となった。

オンライン授業に移行するにあたって重視したことは主体的学習の機会である。オンデマンド形式で、決められた曜日、時限に、資料をコースパワー上で公開し、一週間以内に課題に取り組むことを学生には課した。本授業の特徴は、手紙形式を採ったということである。筆者から、学生への毎週の手紙の形で教育学の各論を示す。筆者と学生間では「お便り」と称して、週に一度、手紙をしたためて送り合う形式を採っている。コロナ以前の通常授業においても、本科目においては、毎授業のリアクションペーパーを青山学院大学の所定の用紙（B5）で課しており、翌週にフィードバックを提示することから授業を進めてきた。そのリアクションペーパーをオンライン上で行うこととした。

授業を進めるなかで、興味深かったのは、こちらが一方的に授業展開するのではなく、むしろお便りから授業が展開していくようになったことである。プラットフォームとして青山学院大学の LMS（学習管理システム）であるコースパワーを採用した⁷。その理由は、コロナ以前にも親しんできたであろうものであり、実のところコロナ初年度の授業開始までの一か月で他の外部のプラットフォームを検討する余裕がなかったためである。以降も、本科目は継続し

でコースパワーを採用しつづけている。

コースパワーへの学生の課題投稿履歴を見ると、複数回やり直して書く学生も散見された。また、学生本人からの申告からも、何度も考え直し、書き直していることが明らかとなった。このことから、学生が期日内に継続的に各論に対して考え、取り組んでいることが分かる。対面であれば、その時限を越えた先に、授業内容について考え続けることや、文章を練ることはなかったかもしれない。そうであるならば、オンライン授業、かつオンデマンド授業だからこそ、断続的に学習が続く効果はあるように思われた。このことは、ひとつのアクティブ・ラーニングの新しい形態とみなすことができるのではないだろうか⁸。もちろん、なにを以てアクティブ・ラーニングとするか、であるが、本科目では、オンライン授業になったことで、親と一緒に各論について、また、自身の幼少期について話をしたという記述が、学生のリアクションペーパーにおいて散見された。以下に、実際の学生のリアクションペーパーの一部を引く（以降、下線部は引用者による）。

実家暮らしでリビングで勉強する習慣があるので、レポートのテーマについて親にどう思う？とか母親が幼稚園教諭なのでこのような経験をしたことがある？ときくことが多々ありました。対面での授業で友達や先生と議論を交わすことがあっても親と話す機会はあまりないので良い時間をつくれたと思っています。たくさん子どもを普段から見て、教育している母だからこそ現実的な課題や意外な事実などを知っており、それを踏まえてレポートを書くことができたと思います。また先生の提示して下さるテーマも最初は難しいかとも思うこともありましたが、具体的な例やわかりやすい説明のおかげで理解することができました。今考える教育は今の時代に合ったものであり、時代の変化とともに教育の在り方はこれから変化していくと感じました。

自分が幼少期にこんなことを勘違いしなかったか？などのテーマについて

の課題は、友達の回答を聞いてみたりしましたが、いろいろな視点があった面白かったです。みんなでの会話の話題になるような課題内容だったことが、この授業を楽しめた理由かなと思います。

従来の対面授業では、帰宅してまで当日の授業について家族と話題にすることは考えにくいですが、家庭内で大学の授業に取り組む場合、その場でアドホックな対話が家族間で生まれやすい状況が生まれたと考えられる。

それでは、具体的に学生がどのように課題に取り組んだのか、教材と課題についてつづく節にて示していきたい。

ポストコロナのオンライン授業としての（往復）書簡

2024年度の授業は、オンライン授業としては、5年目を迎えた。本科目における教材と課題の特徴は、それらが（往復）書簡形式（学生には、「お便り形式」と示した）を採った。（往復）書簡とは、いわばオンライン上でのテキストによる対話である。

本稿のエピグラフに示したマーク・ヴォネガット（Mark VONNEGUT）による『エデン急行』の一節、「会話に長けた人間になることこそが、リベラルアーツ教育のすべてである⁹」と捉えると、けだしリベラルアーツの各領域における学びの内容こそが会話のための内容として活きるのだろう。本科目もまた、カリキュラムポリシーにみる「人間理解関連領域（領域B）」として科目が位置付けられており、人間理解についての教育責任を果たすことが求められるだろう¹⁰。加えて、同時に「会話に長けた人間になること」を目指すための、（往復）書簡は紙の上での会話であり、リベラルアーツが目指す授業の手段のひとつとして在りたいと考えてきた。

SNS におけるテキストによる対話とは異なり、本科目における往復書簡は、コースパワー上でのテキスト対話のため、既読が確認できるものではない。また、簡潔であることが求められるのではなく、スピードが問われるものでもない。それらのSNSにおけるテキスト対話とは異なり、本科目の往復書簡は、

届くか届かないか、きわめてあいまいなやりとりである（もちろん、学習や単位取得のための意欲次第でもある）。

取り組んだ課題は各自で手控えやコピーを保存するように伝えており、過去の授業テーマを踏まえた次なる課題を課す場合もあるため、（往復）書簡とはいえ、自ら振り返って読み直すことも機会として複数回設けた。しかしながら、元来、往復書簡とは、自分への控えを保管する営みであり、自身の書き物を保存する行為は、往復書簡としては原点に立ち返った扱いと見なすこともできよう。

このように、書簡とは、相手へ向けたメッセージでありながら、自分との対話のようにも受け取ることができるのではないか。換言すると、本科目における毎週の課題は、学生に課せられた課題であると同時に、科目担当者の課題でもあった。振り返ると、コロナ禍のオンライン授業において、自分を鼓舞するかのように、言い聞かせるかのように、コロナはやがて収束すると、明るい面を見ようとする文面が学生の課題からは散見された。翻って、科目担当者の配布資料もまた、同様であった。

お便りの形態を採ることは、本科目が扱う中心的テーマである教育について、学生が原体験を振り返ることに効果を発揮した。つまり、お便りの形式は、自身の教育現場でのこれまでの体験をエピソード記録として語るのに適していたように思われた。お便りの性質上、科目担当者側からは一貫して「ですます調」を採った。学生には強制したわけではないが、「ですます調」による課題提出がほとんどであった。幼少期に交わした会話や、幼いころに感じたことを、我が事として振り返り鮮やかに示していたことは印象的であった。筆者は、「ですます調」で記すことが「だである調」で示すことに劣ると考える立場にはないが、テキストの印象は変わるため、受け取るコンテクストも変化する。学生が身構えずに相互に共有するには、「ですます調」の柔軟さは一定の効果があったと考える。以下に学生からのリアクションペーパーに記された一節を引く。

〔…〕先生のレジュメが、普段のレジュメとは少し違い、私たちに語りかけるようなスタイルだったため、授業の内容が理解しやすく、考えやすかったです。フィードバックもあることで、他の学生の意見を聞けたり、考えを知ることができて、顔は見えないものの、一緒に授業を受けている感覚がありとてもよかったです。

本科目では、あえて「ですます調」を採用したことに効果があるように学生からの感想からも考えられたが、おしなべてオンライン授業の場合、コメントが柔らかくなることが、先行研究においても指摘されている¹¹。直接接することのできない相手に対しての配慮を、学生はデジタルネイティブとして身に着けていることの証左とも考えられる。

コロナ禍を経て学生が捉えたオンライン授業

では、15回の授業を経て、学生はどのように本科目を評価、批評しているのか、最終のリアクションペーパー（最終回はレポートを課したため、最後から2番目の第14回授業の課題）から見ていきたい（下線はすべて引用者）。

私はお便り形式の授業を通して、普段の授業よりしっかりと熟考できることを学びました。オンデマンドで毎週、先生がプリントのように文字に内容を起こしてくれているので、時間をかけて何度も読み返すことができました。普段の講義では、先生方が話している内容を必死でメモし、どうにか理解に追いつこうといつもあくせくとしてしまいます。ですが、文面だと、講義内容をゆっくりと理解していけます。

お便り形式の授業で学んだことは、対面の授業と違い、個々の「学ぼう」という気持ちが強くなればなるほど、学びも増えるのだろうと感じました。先生からのお便りを何度も読み込んで、自分はどう思うかを表現するという学びの形は、対面の授業とまた違う良さがあると思いました。

お便り形式の授業を通して、最も効果的であると感じた点は「自分ごと」に置き換えて理解を深められる点であると考えました。多くのオンデマンド授業は、スライドの配信とともにその授業スライドを使用した講義の解説動画の配信方式であり、教室で行われる対面講義でスライドを照らし合わせながら講義をきく形とは異なり、自分で時間を確保し、画面と向き合って講義を受ける形であるため、無意識に受け身になる傾向にあると思いました。受け身で授業をうけるというのは、ただ流して見聞きするだけで、内容を全て理解できたように錯覚をしてしまう、ということです。対面講義だと興味がありません内容であったとしても、意識的に聞こうとする傾向があるように感じており、それに対してオンデマンド講義はどうしても「自分ごと」で理解しようとする姿勢を作ることが難しくなってしまいます。しかし、この授業のようなお便り形式であると、情報はすべて講義資料に詰まっており、その講義資料も先生と一対一でコミュニケーションをとっているような内容であるため、簡潔な情報とともに、正しく深い理解を叶えることができ、読み進めるほどに「自分ごと」に置き換えて考えることが自然とできるようになりました。

全体的に、学習を自己管理していることへの自己評価について記されることが多かった。授業形態、配信方法、配信時間を変えることなく継続することで、学生のなかに自分で習慣化することができたのであれば一定の学習効果があったと考えられよう。毎回課題が出るオンライン授業は定着度が高いという研究結果もある¹²⁾。

本授業では授業で求められることを明確に初回に示し、その後2回ほど、授業で求められていることが理解できていない様子が見られた場合は、個別に連絡をしたうえで全体に共有し、ここまでの授業においては大幅な減点対象としないこととした。おおむね3回目までに本科目のルールや授業形態について学生は適応していた。

また、最後にオンライン授業による効果として以下のことを示しておきた

い。近年、配慮学生についての連絡が大学から一科目に複数名は届く。そういった学生についてはより注意深く提出状況や課題の内容についても確認してきた。オンライン授業となってから、本科目に関して配慮学生から個別に授業への要望が出ることはなく、課題提出せずに履修放棄や単位不可となることもなかった。このことについてはオンライン授業への移行による新しい発見であった。配慮を必要としているからこそ、オンライン授業でよかった、とのコメントが挙がっていることから、オンライン授業は、多様な学生対応についても一定のニーズはあると考えられた。

むすびにかえて

5年間のオンライン授業を振り返ると、2020年度は混乱のなか手探りであり、十分な準備が叫ばれたとはいえない。本来予定されていた授業内容を学生に伝えること、また学生が負担なく取り組める適切な学習量について、学生の状況から模索しながら授業デザインを行った。

そして2021年度はある程度の慣れのなか、双方においてオンライン授業への適応が見られた。日常がやや戻りつつあり、明日の社会がどうなっていくのか分からない緊迫した状況での授業ではなかった。学生のリアクションベーパーからも日々の生活を前向きにとらえたものが多くなった。ただし、見聞を広めるような活動的な体験は未だ少ない様子であった。つまり留学や海外旅行、新しい友人との出会いについての話は未だ挙ることはなかった。

2022年度は、オンライン授業もしくは対面授業の選択を大学より問われた。熟考したうえで本科目に関しては、オンライン授業を継続することとした。その理由として、前述のオンラインによる利点が考えられたからである。オンライン授業により、キャンパスを問わずに履修できることへの評価は既に学生からも挙がっていたことは決断を後押しした。

その後、2023年度、2024年度とオンライン授業を継続している。ポストコロナ禍の時代に突入し、日常に浸透したオンライン授業を振り返る機会として、以上のとおり、青山学院大学の青山スタンダードにおける教育学Aおよ

び教育学 B におけるオンライン授業の往復書簡の授業方法の可能性を示した。2024 年度に関しては、青山学院大学にて授業評価アンケートが実施されなかったため、ポストコロナ禍のオンライン授業としての数値化された学生による評価の継続的な検証は待たねばならない¹³。

さらに、オンライン授業の長期研究や、次なる災害やパンデミック対策として、コロナ以降の授業データの保存についても考えていきたい。コースパワー上でのデータの保管についてどの程度の年月保管されることが予定されているのかは分からないが、学生との Q&A を含むやりとりのすべてを研究対象としていきたい¹⁴。

今後の課題として残るのは、ピアラーニングという意味では、学生間の交流が叶っていない。そのためには、Zoom 等のブレイクアウトセッションを設けて学生同士で会話を交わすことも思いつくが、そうではない形、あくまでも「お便り」形式で、他者へ向けたメッセージを共有していくことを考えていきたい。なぜなら、双方向型のアリバイ作りに、場当たりに Zoom を取り入れても、場の共有が困難だと考えられるからである。そうではない継続的かつ負担のない短時間のブレイクアウトセッションを行うことによる学習効果については検討の余地があるかもしれない。ただし、オンデマンド形式を採用している以上、時間を指定して集まることは本科目においては物理的に難しい。別に担当する科目等で検討していきたい。

しかしながら、お便りの形式のままに、学生同士での交流を検討することができるかもしれない。これまでお便りの共有は、抜粋というかたちをとっていたが、学生全員が閲覧できるような形で、またコメントを残すことができる形で「お便り」をプラットフォームに公開し、コメントを交わすことは学生も教員も負担なく行うことができるとも考えられる¹⁵。

このように、オンライン授業の展望は開かれている。オンライン授業であっても、様々な形態を織り交ぜることも可能である。対面授業とオンライン授業を織り交ぜることもまた、可能であろう。ポストコロナ時代の授業形態として「ブレンディッド・ラーニング」の可能性についても検討の余地がある。「ブレ

ンディッド・ラーニング」とは、オンラインと対面の戦略的な組み合わせであり、既に欧米の教育機関において実践やモデル分類が試みられている。なにをどのような目的でどのような割合でブレンドするのか教育デザインが問われてくるのであろう¹⁶。

〔…〕私は基本的に火曜日の朝、通学電車内でこの課題を行うと決めて習慣化していた。オンライン形式は学校に行かなくていい反面、つい忘れてしまいがちなものであるという欠点がある。そのため生徒たち「ママ」の計画力も養うことができると考えられる。この形式の授業は、学習の計画力を高めるとともに、独自の学び方を発見する機会も提供してくれると思われる。

他にもまた、「〔…〕課題が公開された日にリアクションペーパーの内容を確認し、3日程考えてから提出する」ルーティンを伝えてくれた学生もいた。そのメリットを、「対面で授業内にその場で考えた内容を提出するのとは異なって、自身のなかで考えを深めた結果を提出できるのが大きなメリットだ」と示していた。

また、すべての学生が、本科目のお便り形式に親和性を感じたわけではなかったことも記録として残しておきたい。

オンライン授業やオンデマンド授業はこれまでに受けたことがあったが、お便り形式の授業は私も初めてであった。このお便り形式は他の授業で配布される資料よりも砕けていて、会話調の綴りがとても気に入っていた。また、この形式は文章であるからこそ、もし対面なら先生はどんな口調で、どんな表情でこの言葉を発するのか、自由に想像できるという利点があると考えた。その一方で、私はたまにある授業から脱線したお話が大好きなので、正直に、文章では物足りない気がしてしまった。非常にアナログで在るが、授業は先生の顔を見て、先生の声で、話し方で、学びたいという

のが個人の意見である。対面や動画で受けた方が記憶にも定着しやすいと感じた。

ただし、上記の学生も前向きには捉えてくれている。ときに自分のスタイルに合わない授業形態や授業内容からも、思いかげず学びの出会いがあることは、とりわけリベラルアーツ科目の存在価値でもあるのではないか。本稿では、リベラルアーツ科目を、専門的知識の外に位置するものとして捉えていない。あらゆる学問が同等に学際的に接続しようと考えている。ただし、接続するためには学生自らが、学問領域間につながりを見出さなければならない。それは科目担当者が示すものではない。自ら考え、学問が体系立てて繋がったとき、本当の意味で学びがその学生のものとなるのである。その意味において、学生が自分で律して学習を進められる工夫が教員に問われ、学習意欲が学生に問われる。本科目が、リベラルアーツ科目として位置付けられることから、既存の学習形態を越える挑戦を今後も続けていきたい。励むにあたり拠り所となるリベラルアーツの役割について、アルベルト・アインシュタイン（Albert EINSTEIN）が示した言葉を引いてむすびにかえる。

The value of an education in liberal arts ... is not the learning of many facts but the training of the mind to think something that cannot be learned in textbooks (リベラルアーツ教育の価値は、多くの事実を学ぶことなく、教科書から学べないものについて考えるよう頭を鍛えることにある (引用者訳))¹⁷。

謝辞

本稿を記すにあたり、これまでの受講生、とりわけ 2024 年度の青山スタンダード「教育学 A」および「教育学 B」の受講生に感謝する。本人が特定されない形で、授業研究に快く応じてくれたことにより、発表が可能となったことを記してここに謝意を表したい。

また、コロナ禍を含め、オンライン授業のプラットフォームとしてのコースパワーの保障、授業形態をはじめとする授業計画に自由を提供くださる青山学院大学の学務部や、青山スタンダード機構、情報メディアセンターに感謝する。

註

- ¹ VONNEGUT, Mark. The Eden Express, Dell Publishing. New York. 1975, pp.2-3.
- ² 文部科学省高等教育局大学教育・入試課「高等教育段階における遠隔教育の実態に関する調査研究」2023（令和5）年2月28日。
https://www.mext.go.jp/content/20230328-mxt_daigakuc01-000028748_01r.pdf
(retrieved 2024-08-05)
- ³ 文部科学省高等教育局専門教育課・大学教育・入試課「大学・高専における遠隔教育の実施に関するガイドライン」, 2023（令和5）年3月28日.
- ⁴ コロナ禍以前の本科目の授業の検討は、以下の2本の拙稿にて行った。山口理沙「教養の意義と意味、もしくは教養教育の展望と課題—教養教育制度としての青山スタンダードに対する学生理解から—」, 『青山スタンダード論集』, 第7号, 2012, pp.95-106.; 山口理沙「学生に映る大学像からの大学教育—青山スタンダード「教育学A」履修生による大学像—」, 『青山スタンダード論集』, 第9号, 2014, pp.101-119.
- ⁵ コロナ禍の本科目の授業の検討は、以下を参照されたい。山口理沙「コロナ禍のオンライン授業における教育関係の形成—教師・学生間の往復書簡の可能性—」, 『青山スタンダード論集』, 18, 2023, pp.89-106.
- ⁶ コロナ禍の前後の区切りの事由は下記の通りである。コロナ禍のオンライン授業を、世界保健機関（WHO）が2020年1月30日、新型コロナウイルス感染症について、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」を宣言し、そののち、世界的な感染拡大の状況、重症度等からパンデミック（世界的な大流行）とみなせると表明した2020年度からとする。また、日本政府が新型コロナウイルス感染症を「二類相当」から、2023年5月7日にインフルエンザと同等の「五類相当」に引き下げたことにより、「ウィズコロナ」から「アフターコロナ」への移行が生じた2023年度以降を、ポストコロナ禍のオンライン授業とする。
- ⁷ ちなみに青山学院大学のコースパワーに対する学生による評価は、青山学院大学社会情報学部非常勤講師の勝谷紀子による調査を参照されたい（勝谷紀子「オンデマンド型オンライン授業実践およびオンライン授業への評価」, 『青山社会情報研究』12, 2020, pp.21-31）。この調査で、勝谷は「青山学院大学 GSC オンライン授業に関する一斉アンケート調査 2020 July」の質問項目を一部活用し、コースパワーの学生による評価を明らかにしている。講義資料共有ツールのなかでは、コースパワーが最も高かった（4.10 標準値差 1.01）とされている。使いやすさやすべての授業が一括で管理できること、比較的アクセスしやすい、質問登録ができる（Q&A）、どこにながに在るのか明確だから使いやすい、学校からの詳しい情報（履修、就職、各様ツールのガイド等）についてコースパワーから得ることが多いこと、必要、参照したのかを示す機能があり、課題の提出忘れ等を防止できること、課題締め切りのリマインドがあるこ

とが、評価されている。

- ⁸ オンライン授業によるアクティブ・ラーニングの可能性については、以下を参照されたい（村木桂子「ポストコロナの初年次オンライン授業を目指して」、『リメディアル教育研究』16, 2022, pp.115-125）村木によると、オンライン授業においてもアクティブ・ラーニングは可能であるとされる。オンライン授業によるアクティブ・ラーニングは、「場の共有によって社会性や対人関係能力の基礎構築ができること、また初年次生にとって重要な、学びにおける心理的な配慮が可能であることから、ハイブリッド型が適している」とされる。オンラインを活用することによって、教室活動をより有意義なものにすることができるのである。これは、授業をより質の高いものとするためのオンライン授業という位置づけである。

- ⁹ ただし、ヴォネガットが作中で示すこの表現は、スワスモア大学（1864年に創立されたクエーカー教徒によるリベラルアーツカレッジ）の卒業式の様子から、批判的な意味合いが込められている。私小説である本作品において、大学教育批判、とりわけリベラルアーツ教育（のなかでも、自身が中心的に学んだ宗教学）批判の文脈で記された文章である。しかしながら、批判的であってもなお、リベラルアーツが果たしている役割の真実でもあると考えたい。なお、作家カート・ヴォネガット（Kurt Vonnegut）を父に持ち、リベラルアーツを特色とするスワスモア大学で学んだのち、ヒッピー文化への傾倒、精神病を経て、ヴォネガットはアカデミアに戻り医学部に進学、医師となる。リベラルアーツの否定を経て、のちのアカデミアへの回帰が何をもたらしたのかについては本稿の主題からは逸脱するためここに留めておく。

- ¹⁰ 教育研究上の目的・ポリシー（青山スタンダード）青山学院大学
<https://www.aoyama.ac.jp/faculty/aoyamastandard/objective.html>. (retrieved 2024-08-05)

- ¹¹ 鈴木靖代によると、オンライン授業におけるピア・レスポンスの傾向は三点挙げられる。①対面匿名ピア・レスポンスに比べて「肯定的評価」のコメントが有意に多く、肯定的評価の根拠を述べてから、「肯定的評価」コメントをするというようなコメントをもらう立場に配慮する丁寧な説明が多く見られる。②オンライン匿名ピア・レスポンスは対面匿名ピア・レスポンスに比べて「問題点の指摘」のコメントが有意に少なく、問題点に関するコメントをする際には、表現を和らげるため「ちょっと」「少し」「多少」といった程度が小さいことを表す副詞や、「気がする」「かもしれません」といった断定を避ける文末表現が多く見られる。③オンライン匿名ピア・レスポンスでは「いかがですか」のような丁寧な表現が見られる一方、対面匿名ピア・レスポンスでは「気を付けよう」といったような友人に話しかけるような表現が見られる（鈴木靖代「オンライン授業における匿名ピア・レスポンス」、『一橋大学国際教育交流センター紀要』3, 2021, pp.15-26）。

- ¹² 長崎大学のオンライン授業の取り組みから分析する岡田佳子は、「[……]裏を返せば対面授業の場合には、課題もしくは授業外学習の機会を毎週設けていない講義科目がまだ存在している可能性があること」を示唆する（岡田佳子「学生からみたオンライン授業のメリットとデメリット」、『長崎大学教育開発推進機構』11, 2021, pp.25-41）。対面授業か、オンライン授業かの二項対立図式は避けたいが、授業外学習のための時間確保の視点から考えると、授業形態についてのあらたな視座が生まれるようにも考

えられる

- ¹³ 小西英行らによると、「コロナ禍前の対面授業で授業評価の高い教員の多くは、コロナ禍のオンライン授業でも、そしてオンライン後の対面授業でも高い評価を得て」おり、「あらゆるオンライン授業の形態や対面授業においても、教員からのフィードバックがあるほど授業評価の全体満足度が高いことから、こうした授業評価の高い教員の多くは、オンライン授業下で適切にLMS等を活用したフィードバックを行ったと推測され」ている（小西英行ほか「ポストコロナの授業評価に関する考察」、『多摩大学研究紀要』27, 2023, pp.155-161）。同一科目、同一担当者によるコロナ以前の授業形態における授業評価と、コロナ以降のそれを比較検討することで授業研究が深まるだろう。
- ¹⁴ オンライン授業の長期的検証、次なるパンデミックの授業準備のためにもサーバ確保が既に指摘されている（水野勝之「ポストコロナの経済教育の準備はいま」、『経済教育』40, 2021, pp.10-11）。
- ¹⁵ オンライン授業によるメリットとして、教員側からのメリットとして「受講態度への目配りが少なくて済み、授業に集中できる」こと、「教室のスペックに左右されずに授業ができる」こと、一方、学生側からのメリットとして、「通学やキャンパス内教室への移動時間が節約できる（そのため、1限、5限を含め柔軟に履修しやすい）」ことは、内田真人によって指摘されている。本科目においても完全に同意する（内田真人「ポストコロナにおける学びの質向上に関する一考察」、『社会イノベーション研究』18, 2023, pp.1-14）ただし、過度な変化や負担については慎重にならなくてはならない。イノベーションを用いたより質の高い教育の検討は、それによってどのようなメリットがもたらされるかだけでなく、学生と教員の負担を十分に検討する必要があるだろう。
- ¹⁶ ブレンディッド・ラーニングのルーツは、遠隔授業技術にあり、日本でも e-learning として知られてきた。詳しくは以下が詳しい（洪川幸加「ブレンド型授業との比較・従来授業における予習との比較を通じた反転授業の特徴と定義の検討」、『日本教育工学会論文誌』44, 2021, pp.561-574）。また、濤岡優らによると、「教育保障の底上げと拡張」としてのオンライン授業がコロナ禍を経て増加したことや、日本の教育現場でブデンディッド・ラーニングの導入が進んだ背景には、自律的な学びや自学自習の促進を期待する教育提供者の側の意図があった。しかし、コロナ禍によってオンラインツールの使用が急速に普及し、学習形態の選択肢の拡張と、それによる個別ニーズへの対応が可能となったからこそ、今後教育機会の十分な補償という観点を改めて議論が求められるとされる（濤岡優ほか「日本における「ブレンディッド・ラーニング」の研究動向」『静岡大学教育実践総合センター紀要』33, 2023, pp.21-31）。現在、「ハイブリッド」の表記も多くみられるが、ハイブリッドは、二つ以上のものを組み合わせるといふ外形的な意味しか持たないのに対し、「ブレンド」とは、「より効果的あるいはよりよい結果をもたらすために、異なるものを組み合わせる」ことであるとされる（田口真奈「授業のハイブリッド化とは何か」、『京都大学高等教育研究』26, 2020, pp.65-74）。オンラインツールを活用しての授業展開は、しかしながら、どのような効果があるのかを検証し、採用する必要がある。単純に両方の形態を採用すればハイブリッドなり、ブレンドしうわけではない。このことは、大学 DX としてのデジタルツールの採用として、上村敏之らによっても指摘されている。上松らは、「デジタル技

大学教育におけるポストコロナ禍のオンライン授業の展望

—「教育学 A/B」における教師・学生間の往復書簡の授業形態の継続から—

術による授業の「個別最適化」は適切なサポートやケアなしに進めると孤立化をもたらす」と主張する。ポストコロナ禍の大学においては、「オンライン授業と対面授業の棲み分けと融合を含むバランスの良い再編成がもとめられる」とされ、「[「オンライン授業が望ましい」「対面授業が望ましい」といった単純な二項対立に陥ること]には警笛を鳴らしている。「学修効果の高い授業形態はどれなのか、といった観点から、授業形態のあり方を考えることが大切である」としている（上村敏之ほか「ポストコロナ時代の大学教育」、『関西学院大学高等教育研究』11, 2021, pp.53-84）。

- ¹⁷ The New York Times. EINSTEIN SEES BOSTON; FAILS ON EDISON TEST; Asked to Tell Speed of Sound He Refers Questioner to Text Books. Special to The New York Times., May 18th, 1921. なお、不確かな情報の断片から、当記事を原典のままに手繰りあてることができたのは、和光大学図書情報館の鯨形七海様のご尽力のおかげである。知の守人である図書館司書のお力添えにより、我々学者は日々貴重な資料（史料）にあたることができています。ご対応いただいた聖心女子大学にも感謝したい。